

第3回日中若手化学者フォーラム

第93春季年会の国際交流イベントとして、3月24日、立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて第3回日中若手研究者フォーラムが開催された。今回のテーマは「元素の有効活用と化学への応用」をテーマとして合計13名が発表し、交流を深めた。中国からは中国科学院化学研究所のSanzhong Luo教授（写真前列右端）を代表として発表順に、Nanfeng Zheng教授（厦門大学）、Wen-Xiong Zhang准教授（北京大学）、Shou-Fei Zhu准教授（南開大学）、Aiwen Lei教授（武漢大学）、Qilong Shen教授（中国科学院上海有機化学研究所）、Liang Zhao准教授（清華大学）の7名、日本からは筆者（写真前列左端）を代表として発表順に、橋本英樹助教（岡山大自然科学）、有田亮太郎准教授（東大院工）、藤田武志准教授（東北大AIMR）、林克郎准教授（東工大応セラ研）、中村芳明准教授（阪大院工）の6名のほか、玉尾会長（写真前列中央）、川島常務理事（写真左端）が参加した。

日本側の発表者については、我が国の施策の1つである「元素戦略」に則った研究を行っている若手研究者から、有機化学・無機化学・理論化学・生物化学等の幅広い分野をバランス良くカバーできるような人選を心掛けた。中国側のLuo教授にも今回の趣旨をお伝えし、鉄触媒や超原子価ヨウ素を用いた有機反応や金属クラスター集合体、ナノ結晶に関するものなど、「いかに元素を使うか?」という点に焦点を置いた研究者を集めていただいた。

フォーラムの開始直後は、分野の違い



などで戸惑うところも見受けられたが、最終的には、分野外のわからないことは何でも訊くという打ち解けた雰囲気の中にも深い議論が交わされるなど、異分野の相互理解にも貢献できたものと思われる。また、比較的クローズなフォーラムであったにも関わらず、教室が満員になるほど来聴者が集まるなど、大盛況であった。企画時点では政治的に緊迫した状況から、本フォーラムの開催が微妙な状況であったが、最終的には無事執り行う

ことができた。本フォーラムを新たなきっかけとして、日中両国の若手研究者の間に「化学」を共通の言語・価値観とした連帯感が高まり、今後の交流とさらなる発展の一端となれば幸いである。

末筆ながら、今回のフォーラムの人選にあたりご助言をいただいた細野秀雄先生、開催にあたり多大なご尽力をいただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

〔辻 勇人（東京大学大学院理学系研究科）〕

© 2013 The Chemical Society of Japan

日中若手化学者フォーラム後記

第1回日中若手化学者フォーラムは2010年、「低次元ナノカーボン材料」をテーマに中国化学会の開かれた厦門大学で行われた。筆者（写真左）は日本側の一員として参加した。フォーラムの様子は当時の記事（本誌2010年734頁）をご参照いただくとして、筆者は後日談を任されている。

第1回フォーラム（2010年6月）の直後、タイミングよく「低次元ナノカーボン材料」の分野でグラフェンがノーベル物理学賞を受賞した（2010年7月）こともあり、本分野は中国を始めとして世界中で大変な盛り上がり続けている。中国側参加者はフォーラムでも感じた勢いが本分野の盛り上がりにも加速され、その後トップジャーナルを連発している。特に中国側団長であったJin Zhang教授（北京大学、写真右）はナノカーボン研究のトップ研究者の地位を確立している。このような活躍をジャーナルで見かける度に筆者も大きな刺激を受ける。その意味で、ほかの国ではなくアクティビティーの高い中国の研究者と交流を組んだ意義は大きい。

本フォーラムは、若手の個人レベルの連携を構築する目的で始まったが、実際に中国側と日本側の参加者交流はメールディスカッションやサンプル測定等を通して継続している。筆者はアジアの国同士らしく、年賀状の交換等、研究以外の交流も続けている。フォーラムの主旨は十分に達成しているのではないだろうか。

その後日本側参加者も着々と実績を重ね、ナノカーボン研究を牽引する若手研究者として活躍していることも追記したい。後に振り返ってこの第1回フォーラムが世界をリードするナノカーボン化学者が若かりし時代に一堂に会した記念すべき会になることを望んでいる。

〔藤ヶ谷剛彦（九州大学大学院工学研究院）〕



2010年、フォーラム後のカナダでの学会にて。筆者（左）とJin Zhang教授（右、中国側団長）